

写真に写っているのは、アカマツの雄花です。春になると、前年に形成された芽の付け根付近に、このような黄褐色の小さな穂状の花がまとまって現れます。一つ一つは1~2cmほどしかありませんが、枝先には数十個もの雄花が集まり、木全体として見ると意外に目立つ存在です。花びらや蜜はなく、昆虫ではなく風の力を利用して花粉を運ぶ「風媒花」のため、派手な装飾を必要としません。細長い葉の間から顔をのぞかせる姿は地味ですが、アカマツの繁殖を支える重要な器官です。

この時期の雄花の内部には大量の花粉が詰まっており、成熟すると風に乗って一斉に放出されます。松林の近くで黄色い粉が積もったり、水たまりの表面に黄色い膜が浮いたりすることがありますが、その多くはアカマツやクロマツの花粉です。北軽井沢には意外とアカマツが多く、自動車を屋外に駐車していると、花粉の飛散が盛んな時期にはボンネットやフロントガラスが黄色く染まることがあります。花粉には小さな空気袋が付いており、わずかな風でも遠くまで運ばれるよう工夫されているため、このような現象が広い範囲で見られるのです。

写真の右上には、まだ伸び始めた新芽も見えています。春のアカマツでは、この新芽の先端付近に赤紫色を帯びた雌花が現れ、受粉に成功するとやがて緑色の若い球果へと成長します。そして一年半ほどの時間をかけて成熟し、私たちがよく知る「松ぼっくり」になります。普段は樹皮や葉に目が向きがちなアカマツですが、この季節に枝先を観察すると、目立たないながらも巧みに進化した花の姿を見ることができます。裸子植物ならではの独特な繁殖戦略を知る上でも、たいへん興味深い観察対象です。

(2026年6月上旬／北軽井沢)

